

戒律の展開

土 橋 秀 高

1 戒律の両面

戒律は時処諸縁によつてかわらぬ一貫性をもっている。戒律は僧伽の規制であるから画一性をもつていなければならぬ。事情によつてその適用がことなるということでは規律という機能を發揮することはできない。ここに戒律の形式主義と貶せられる面がある。しかも時は移り処は変り事象は種々様々である。ために画一性は戒律そのものを現実から遊離せしめ、その存立をおびやかすことになる。これは戒律のもつ悲哀であり自己矛盾である。戒律が仏行として位置づけるためには、もう一つの面がなくてはならぬ。現に戒律は即応性という面をもっている。時処縁に密着さるものでないと規律として生きた機能をもつことはできない。この二面が矛盾的に張り合っているのが戒律の本来の相である。

しかしこれは戒律の理念であり、必ずしも現実相ではない。実状ではこの二面が張りあいつつ、いづれかに傾りを示している。たとえば、比丘戒の場合仏陀の制戒は随犯随戒で

あつて、戒本全部が一度に制せられたものではない。制条も所謂満足戒本にいたるまでに曲折を経ている。やがてそれは教団の確立とともに不変性が強調され、条文の数までが画一化される。一方菩薩戒は人間の本性にもとづく十善業説の進展を基盤として、後に仏性戒として説かれるごとく、一貫の人間性に根ざしているが、菩薩教団の實際にそなえる即応面が内容にもられることにもなる。このように、比丘戒の場合は随応から画一へ、菩薩戒の傾向は画一から随応へという経過をたどる。

2 展開の要因・背景

それでは戒律が展開する要因はどこにあるだろうか。まず仏陀制戒の当初から弾力性なり制戒の幅がみられる。随犯随戒ということ自体が戒律の展開を示している。五篇・八類という分類がなされるような数の戒条がそろふまでにはかなりの時間がかかっている。個々の条文もその決定版とも云うべきものまでには紆余曲折があり、補足訂正が加えられてい

戒律の展開（土 橋）

る。満足戒本・毘尼増ということがそれを物語っている。このように律藏のなかにも展開の要因がみられる。さらに律藏の結集にあたり、阿難は仏陀が僧伽の羯磨にまかされた小々戒の存否の範圍を聞きのがしたという。そこで僧伽の和合を案ずる摩訶迦葉によつて、如來の制し給うところを制し、制し給わざるを制せずとして、在世の律制を一律に仏制として定着せしめられたという伝へのなかにも展開の一段階をみることができる。つまり小々戒の解釈をめぐる支点である。その後滅後の時流に應じて適用にうごきがみられる。また僧伽の地域拡大移行にともなう展開がある。山地沙漠を越えて中國に仏教が伝わつたとき、その氣候風土の影響をうける。戒律は仏教者の生活方を指示するものであるから、最も具体的に微細な点にその風土の反映があり、持戒生活の変様と戒律の受容適用そのものの差異とがからみあつてゐる。著るしい例として衣食の上をおもえば端的にそのことがわかるであろう。また変様の度合に種々の場合があり、世代地域に應じて持律の重点のおき方乃至取捨迂折に差異があらわれる。道安が行香定座上經上講の法・日常六時行道飲食時法・布薩差使悔過等法の三例を抽出し、天下の寺舎がこれにならつたという（大正五〇・三五三中）ごときがその一例である。

みぎの時流と地域に應ずる変移を、戒律のたもたれる背景とでもみると、それに対して持律者の態度という主觀の側に

ある展開の要因が考えられる。つまり人的条件である。まず仏弟子には男性と女性とがあり出家と在家とがある。男性には比丘・沙弥・優婆塞の戒が、女性には比丘尼・式叉尼・沙弥尼・優婆夷の別があり、夫々持戒者の上に差異があるのが、グループとなると大きくは部派分裂があらわれ、各派に独自の律藏が伝えられる。出家と在家の別は大乗仏教時代になると、極めて複雑な様相を呈することになる。すなわち菩薩戒は出家を主軸として比丘戒の上に菩薩戒をおく瑜伽系と、出家在家両者の基底に戒律をおく梵網系とがあらわれる。これらは持戒者が戒律をどう受けとめ位置づけ理解するかにもとづく展開相である。

このように持戒者の態度によつて具体的な戒相の上にも種々の差異がみられるとともに、さらにその仏教者の信奉する教学乃至宗学によつて、それとの関連をもつた戒觀があらわれることになる。古來戒体論の上でその顯著な例としてあげられる四分律宗の東塔・相部・南山の三宗戒体説、さらに大乘仏教の戒体論がそのことをあらわしている。俱舍論によつて無表色戒体説を称えるもの、成実論によつて非色非心の戒体論を立てるもの、法相教義を背景として心法戒体説をとるもの、さらに同じ梵網戒本を注釈しても天台の義疏と法藏の戒本疏ではそれぞれ背景となる教義によつて特色を発揮するごときがそれである。

このようにして戒の当初にみられるものから、時代・地域・持戒態度・信奉する教学という種々の要因がからみあつて、随分ちがつた戒観があらわれることになる。同じ末法当来の自覺にたつ仏教者においても、解脱・明恵等の聖者は戒律復興をおし立て、一方法然・親鸞が末法無戒というところに自からの行道を見出すという相違にも、また同じことが云える。

3 展開の二類型

上に戒律展開の要因及びその背景を考えたが、ここで戒律自身がその展開の経過にあらわしてゆく様相を二つの型に類別して把握してみたいとおもう。それは分化と統合の二つの動きである。

仏教の実践部門の現状を、戒律という視角からながめてみると、仏行と仏事と宗制という三部門に分化されているようにおもわれる。仏行としての戒律、それは戒行という概念で把握される仏道修行そのものとして位置づけられる。三学一体とか絶待三学と云われるような、戒定慧の三学を自からのなかに体認するその戒行である。これは戒律が仏道の中心にある姿である。このことは、戒律の根元にある「別々解脱」という理念そのものであることを意味する。解脱は仏道の究極である。その解脱に直結する相が戒行ということである。

次の仏事とは所謂仏事作法であつて、戒律がもっている威

戒律の展開（土橋）

儀作法という機能の部門である。作法は日常生活様式の規範であり、僧伽をして対外的に威容あらしめるものである。対外的に社会一般につながっているのも、土俗風習と接し、文化のあらゆる面に拡がりをもっている。この部門は仏行・戒行と正反対な方向をとり、俗化の道をたどる。その反面では、世俗と出世間道との接点であるので、世人をして仏行にさそう利他のはたらきをはたすことにもなる。もともとこれは戒律の根本理念にある「威儀」という面の展開である。宗教に威儀作法は不可欠の要因であり、それが世俗とどのように接触するか、またどれだけ宗教本来の意義をふまえているかによつてその宗教性が云々されることになる。戒律は正しく仏教のなかのこの部門に位置する。

さらに宗制という戒律の部門であるが、教団は必ずそれを統制する宗門法規をもっている。戒律は所謂十句義を集めるために結戒されたもので（大正二・五七〇下）、十句義には、一に僧を摂取す・二に僧をして歎喜せしむ・三に僧をして安樂ならしむ、とあるごとく僧伽の維持ということが大きくうたわれている。これは戒行の「学則（*śikṣapada*）」という理念の展開である。戒律の存立がうすい現代日本の仏教にあつても、みぎに指摘した仏行・仏事・宗制という三部門に分化している戒律の相を顕著にみとめることができる。

他面、戒律には統合の傾向をたどるすがたがみとめられ

る。大乘仏教の実践法として強調される波羅蜜行がまず注目される。ここに戒律は尸羅波羅蜜として六波羅蜜に統攝される。次いで、比丘戒に対する菩薩戒の独自性をはじめてうたう菩薩地持経が三聚淨戒を説く。そこで菩薩の一切戒に在家と出家の二種あり、また律儀戒と摂善法戒と摂衆生戒の三種ありとする。その律儀戒は七衆の戒であり、摂善法戒は菩薩の律儀戒と大菩提をめざす身口意の業が一切おさまリ、摂衆生戒には十一種を略説する（大正三〇・九一〇中）。このように三聚淨戒説は、戒を中心として一切行を統攝するというところで六波羅蜜行としての統攝よりも主体的である。さらに中国に入ると、律教を以て四分円宗を宣説した道宣に化制二教の判がある。彼は一大仏教を化教・行教に總括する。化教は教化の理行教はその実践部門で制戒をおく。理論と実践とかまえ、戒律にその実践行を抱摂する。日本仏教においては鎌倉期の行の専修化の波にのつて、念仏と戒律をもつて仏行を統攝するものから、禪戒一致を説くもの、さらに念仏に戒をおさめる念戒一味論など種々の型がでてくる。

さてこのような戒律の展開にみられる二類型は、互に長短をもっている。分化には分離分裂がともなう。戒律は仏教道徳・法律といった意味をもっている。しかし仏教道徳とか仏教の法律ということでは盛られない内容や性格をもっている。それは戒律が仏教という宗教の実践法であるからであ

る。仏教の究竟地である解脱涅槃に結ばれないものは戒律とは云えない。それが分化の経過においては、本来の戒律の精神・制戒の意図から離脱してしまい、メカニクなもの形式的なものになってしまふ。しかし一方では分化への歩みが、時代・地域に対応し得て戒律の生命である具象性を一層はつきり發揮するという長所をもっている。統攝には、この反対に戒律の具象性を失つて抽象・觀念化の傾向をたどる。戒律の本意に帰投せんとする求心的態度は、理戒とか仏性戒とか、一得永不失といった觀念化をみちびき出す。そして個々に具体的に対応する細密さに欠けて、戒律としての機能を鈍化してしまふ。そのかわり往々にして形式にくくられて制意を忘却する失点、所謂戒律の形式主義化を越えるはたらきをはたすことができる。比丘戒の形式主義化を救つて菩薩戒へと戒律の生命を保持していった経緯に思ひいたるなら、このことが首肯されよう。またその反面では菩薩戒においては比丘戒の具象性を次第に觀念化していった動向も、同じように理解されるであろう。

（竜谷大学教授）